

ローマのバロック様式を巡る（４）ボルゲーゼ美術館からバルベリーニ広場へ

藤原 道夫

ローマ市街の北、城壁の外側に緑地が広がっている。その一角にある瀟洒な建物はシピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿の夏の別荘として建てられ（1616 完成）、現在ボルゲーゼ美術館として使われている。洒落た横階段を数段登って中へ、壁や天井は美しい絵画・文様や色大理石で覆われ、その豪華さに目を見張るばかり。枢機卿の身分でこのような別荘を所有できるとは、余程の財力を持ち合わせていたのだろう。

美術館の所蔵品は主にルネサンス期～バロック様式の彫刻と絵画。彫刻室にベルニーニの力作が数点ある。「ダヴィデ像」を見ると、体を捻って今にも石を投げ出しそうな構え。この動的な造形こそバロック様式の特徴だ。絵画室にラファエッロやカラヴァッジョらの作品が展示されている。至宝はヴェネツィア派の画家ティツィアーノ作「聖愛と俗愛」（1514）とされる。見学はだいぶ前から時間帯の予約制となっており、2時間ゆっくり見学して裏庭に出た。

噴水のある緑地を過ぎてピンチアーナ門をくぐり、ヴェネト通りに、近代的な立派な建物が連なる清々しい並木道に行く。所々にカフェがある。ローマで時折見かけたのは、カウンターに立ったままカフェ（エスプレッソ）を3、4口で飲み干し、颯爽と立ち去るスーツ姿の男性。私ども観光客は急ぐことはない、「カフェ・ド・パリ」のテラス席に陣取り、カプチーノを飲みながらのんびり過ごす。ここは映画「甘い生活」の舞台になった場所柄だ。

カフェを出てくねりと曲がると教会が見える。中に無数の骸骨が飾られていると聞いたが、パスしてバルベリーニ広場へ。真ん中に大きな噴水、イルカが支える高い台座の上の貝殻に乗ったトリトネが、両手で口に当てた法螺貝から水を高く噴き出している。数あるローマの噴水の中でもとりわけ立派だ。広場の隅にも貝殻をかたどった噴水があり、下の方に蜂が3匹彫ってある。これはバルベリーニ家の紋章とか。噴水は二つともベルニーニの作品。

蜂の彫刻を眺めていると、通りがかった人が噴水の水を飲んでさっと立去って行った。ローマの噴水の水は、Non-potabile（飲めない）と掲示してなければ飲めるよう。真似して飲もうとしたがうまいかない。あの人は慣れている土地っ子なのだろう。

ここから歩いて10分ほどでスペイン階段の上まで行けるのだが、今回はここまで。